大友氏の歴代墳墓を巡る（七）

――一二代持直――

古藤田　太
（会員・弥生町江良）

第十二代大友持直
文安二年一月四日
観音寺殿通玄理光大禅定門
菩提寺　別府市亀川四ノ湯　黄檗宗観音寺

一、三角畠の乱

大友持直を三角畠の乱あたりから語り始めよう。南北朝という争乱期は骨肉相分かれて戦うことが各所に見られた。大友九代氏継は弟の親世に家督を譲り、幼児親著の養育をも託して府内を去って南朝軍に投じた。こうして大友氏と敵対関係に入ったのは応安元年（一三六八）頃とされている。親子兄弟が敵味方に分かれ攻め戦う当時の浅ましい姿は、道義の退廃、人心の荒廃と言うよりは「家」や「所領、所職」の保全を続けようとする思想からであろう。この氏継の家督は僅かに数年にすぎなかった。

第十代親世が心をこめて養育した兄氏継の一子親著に家督を譲ったのは応永八年（一四〇一）頃である。この頃の両統迭立（てつりつ）は深い意味が隠されているように思う。

大友第十一代親著は、親世没後五年、応永三十年（一四二三）に今度は自分の子供を差しおいて、親世の子の持直に家督を譲った。

（略系図）

氏時（八代）
- 氏継（九代）
  - 親著（十一代）
    - 孝親
    - 親綱（十三代）
    - 直親
    - 親繁（十五代）
- 親世（十代）
  - 持直（十二代）
  - 親棟
  - 親隆（十四代）
  - 親直
  - 親雄
  - 僧

略系図でわかるように、十一代までは順調に家督相続が行われた。十一代親著が子息が

ありながら持直に家督を譲った際、親著の長子孝親は不満やるかたなく、持直を殺して大友家督たらんとして乱を起こした。

これは、大友家の家督相続上の内紛のように思われるが、実はこの叛乱は背後に大内氏が関係していると見らるゝのである。

『豊筑乱記』『両豊記』等の伝えるところでは、親著は殺され、孝親も切腹して果てたということになっているが、親著はどうも永享十二年頃まで生存していたようである。

応永三十三年（一四二六）十一月、古国府から花園に通ずる道端にある三角畠で起ったこの殺戮事件を三角畠の乱と呼んでいる。

二、大内氏の九州侵出

周防の太守、大内盛見は、当時豊前国の守護であったが、大内氏は義弘以来九州侵出を企図していた。三角畠の乱では、当の大友持直は無事であったが、乱後持直の手によって孝親派の残党狩りが徹底的に行われた。孝親の弟、親綱は大内氏の所領豊前に逃れ潜んだことも大内氏との関係を物語るものである。

九州探題として派遣された渋川満頼は極めて凡庸であったらしく、中国の雄、大内盛見はこの九州探題の後見的且又護衛軍の使命をもって九州に侵出してきた。もっとも、盛見は豊前、筑前の守護をも兼ねている大勢力でもあった。

大内氏の九州侵出は、朝鮮や明国との対外貿易港博多を押さえらるゝことで、大友、菊地、少弐の九州勢はこれに反抗の姿勢をとり続けた。

応永三十二年七月（一四二五）になって少弐、菊池氏は反大内の兵を挙げたが、大内氏は直ちに九州に出兵してきて、やがてこの二氏軍は鎮定された。この戦乱の最中に、三角畠の乱が惹起したのである。少弐、菊池氏の挙兵に呼応して大友氏の挙兵を避くる為に、大友親綱と連繋して、大内盛見が仕組んだ三角畠の乱であったとみらるゝのである。

その後、九州に於ては大友、大内の争覇は絶ゆることなく続いた。幕府も見かねて両氏の和睦を取りはかろうとした事があった。

然し、永享元年（一四二九）六月二十八日、大内盛見

は筑前萩原で大友、少弐の連合軍と戦って大敗し、自刃してしまった。

幕府は大きな衝撃をうけ、幕府の態度は一変して硬直した。大内盛見は幕府の出先機関九州探題の強大な護衛軍であるばかりでなく、幕府の博多直接支配の工作者でもあったからである。幕府は盛見を自刃させたことは幕府に対する挑戦と受取って、これから幕府は執拗なまでに、大友、少弐の孤立化と抹殺をはかってゆくのである。

三、幕府の持直退治

幕府（六代、足利義教将軍）は自刃した盛見の子が幼少なので、兄義弘の子持世に大内氏の家督を継がせ、中国、四国の兵を増援軍としてつけることゝした。

気の強い将軍義教はあらゆる謀略を考えた。例えば、

一、大友氏の盟友菊池持朝に、持直のもっている筑後国の守護職を与える。

二、大友氏内部の撹乱をはかる。

親著の子親綱に、持直の豊後守護職を与え、又持直の弟親隆にも夫々好餌をあたえる。

このように幕府の大友内部の離反政策で、大友氏の結束は乱れ、永享三年十月（一四三一）、大内持世が筑前へ進撃して持直と戦った時は、大内軍優勢の前に持直は敗退してしまった。

永享四年十月、幕府は明確に豊後守護職を親綱に与えている。

『満済准后日記』によると、親綱の陣営に、日田、田原氏と共に佐伯氏の名が見える。私が義鑑の項で既に説明したように、将軍の親衛軍的組織の奉公衆の中に佐伯氏等が所属しているため、この際将軍より大内持世に忠節を励むよう沙汰されているものである。

幕府の持直に対する措置の概略をのべてきたが、持直にしてみれば、幕府のやりかたは余りにも一方的であった。持直は幕府を敵に廻わす意図などあろう筈がなく、大内氏の九州侵出、特に博多占拠を拒むための大内氏との争覇であり、私闘であるわけで、幕府に対する忠節には少しもかわりが無い旨金穀を献じ、使節貞岩和尚を遣わして持直の立場を弁明してきたが、幕府は謀略を以て酬いるばかりであった。幕府には博多直接支配の下心があったと考えられている。（『中世九州の政治と文化』—川添昭二）

当時、全国的に土一揆が頻繁に発生し、幕府はその対応に手を焼いていた時代で、幕府も必要以上に神経過敏となっていたのかも知れない。

田北学氏はこの頃の世相を次のように説明しておられる。

「南北朝争乱により、人々私利私欲、党利党略に走り、強食弱肉の風潮を助成し、又他方に於ては、九州探題の存在が有名無実となり、その威令行はれざるに至り、九州の諸大名は戦国封建大名の如き色彩をますます濃くし来れるものの如し。応永、永享年代頃より世の中が急激に変化せるの感あり」と。

『大友史料』永享元年（一四二九）五月十八日の項に「生年十歳の女子を代銭一貫三百文にて五ケ年入質す」とある。これも当時の世相を反映するものであろう。

四、姫岳の戦

持直はここに至って徹底抗戦の決意を固めざるを得なくなった。

持直に味方する者は、十一代親著、その四男親重（繁）（十五代）持直の弟親雄、少弐満貞、菊池兼朝、大内持世の弟持盛等である。

永享五年（一四三三）三月五日、大内持世は、持直、少弐満貞討伐の御教書と、み旗を幕府から貰い官軍的立場に立った。援軍として、安芸、石見、備後、四国の伊豫あたりからも動員されて、大軍を以て九州に攻めこんできた。

諸々の戦斗で、持直軍は大内持盛、少弐満貞、その二人の子息、持直の弟親雄等が戦死する打撃を蒙った。この惨たる戦況の中で持直等は一時行方をくらましたが、やがて現われ戦陣をたて直して、大内軍と一進一退の攻防を繰り返していたが、永享七年（一四三五）六月二十九日頃より持直等は臼杵の姫岳に籠った。

この難所を攻撃した大内持世、河野通久等は敗退し、錚々たる諸将が戦死した。河野通久の戦死に対して幕府は臼杵庄を与えた。この辺り臼杵、佐伯一円に現在河野姓が多いのもこのことに理由があるのかも知れない。

敗退した持世軍は、今度は数を頼んで姫岳に籠る持直軍を包囲して食糧攻めにかかったが、持直に味方する海部水軍が、彦岳ルートで尾根伝いに食糧補給を行った為に効果は挙らなかった。

持直は史料で解るだけでも、永享元年、九年と、海を越えて使節を朝鮮に送り修交を求め通商を行っている。これからも続いた持直の反抗戦力は海外貿易に依存するもので、これには大きな水軍力が必要であった。海部水軍（仮称）は持直水軍力の一部にすぎなかったと思う。

姫岳戦の初期は、こうした持世軍の苦戦が続いていたが、幕府の策に乗って、持直軍から次々と敵に通ずる者が続いて、永享八年六月十一日姫岳城が落城した。その後、第二次の姫岳戦も展開されたが長く抗戦はできなかった。持直は敗戦ごとに必ず行方をくらまし、生き延びた。永享九年（一四三六）初頃、大内持世は九州を平定し終って周防に凱旋した。

その後、大友親綱は家督を親隆に譲っている。永享十一年（一四三九）頃のことであろう。永享十二年（一四四〇）、幕府は持直党の切崩しのため、少弐氏に対する治罰を中止し、持直、親著、親繁の残党征伐を命じている。持直の抗戦は絶ゆることなく続けられたことが解る。

嘉吉元年（一四四一）になって天下の大事件が発生した。

五、嘉吉の乱

六月二十四日、赤松満祐は京都の自分の邸宅に将軍足利義教一行（大内持世も含まるゝ）を招待して、饗応し、晩に及んで義教等を殺し、邸宅を焼いて郷里播磨に引き揚げた。この嘉吉の乱に、持直の宿敵持世も重傷を負い、一ケ月後の七月二十八日に死去した。

将軍は義勝に変り、又大内氏でも、持世の後を教弘が継いだ。

『大友家文書録』持直譜に、

「嘉吉元年七月、赤松満祐が謀反を起こして京都が乱れた。大友持直は九州に居て、この満祐の叛乱に力を貸したので、将軍義勝は大内教弘に命じて持直を撃たせた。八月、大内教弘は船隊を率いて九州に進み、潜伏中の持直の動向を探り機会を窺ったが、持直は却って部将に命じて、大分、国東の両郡に於て教弘軍を撃退した。佐伯惟世（佐伯氏第九代）はその領地の堅田、宮内、代後浦において教弘軍を大いに撃退した。教弘軍は敗れて周防に引揚げた。佐伯氏は緒方三郎大神惟栄の後裔で、久しく大友氏に従っていて、子孫は連綿

と続いる。」概ねこのように述べられている。

大友持直は転々と居所を変え、再起を図ったものか、何処かに潜む隠れ家があったものか私は永い間関心と興味をもっていた。持直は衰えたりとも尚強大な水、陸の予備戦力があったであろう。佐伯氏系図によると、持直の妻は、佐伯氏第九代讃岐守惟世の妹である。持直は、この時佐伯の地に隠棲していたものであろうか。

このような情況下に嘉吉元年の堅田合戦が展開されたのである。

大友持直の墓

六、晩年の大友持直

永享十二年（一四四〇）持直の同盟者親著入道々瑛が死去した。又よく持直を護り、力となった親繁は、第十三代家督親綱の後を継いだ十四代親隆の娘婿となって、持直の許を離れて行った。その後第十五代親繁となるのである。歴史の皮肉さに驚くものがある。この親繁は持直の対外貿易の実蹟を最もよく継承し、乱世の産業疲弊のなかに、大友氏の経済基盤をここにおいたと考えてよいだろう。

数多く居た持直の党類も戦死し、死去し、或は持直の許を離れて行った。人生の大半を数奇な運命に翻弄されて、独り寂寥のなかに最後まで反抗を続けて文安二年（一四四五）正月四日、大友持直は死去した。

大友義一氏保有の「当家代々御位牌」には

観音寺殿通玄乾理大禅門

号中務大輔持直、親世之御一子也

又「大友系図」中の第十二代持直の添書に

文安二年乙丑正月四日逝去號観音寺殿前中書侍郎通玄理光大禅定門、観世音寺在豊後国速見郡平田邑號圓通

山、とある。

持直の菩提寺は速見郡平田邑にあって圓通山と号すとあるから、去る八月末、小野英治氏を誘って、黄檗宗圓通山観音寺（別府亀川）をたずねた。

観音寺の裏手の森の中に、古びた、大きからぬ五輪塔一基が石壇の上に安置されていて、その前に壇上の五輪塔と因縁深げな五輪塔群がおかれてある。薄暗い森の中で、持直公の墓という五輪塔を拝観していると、思いはるかな中世に走り、千々の感慨が迫ってくる。別に銘文などないが、寺の伝承である。

観音寺縁起というプリントを住職からいただいた。それによると、持直が観音寺を建立したのは永享八年頃で、文安二年（一四四五）一月四日、六一才で死去した。本堂にある位牌には観音寺殿前豊筑肥国司鎮西探題通玄理光大禅定門神儀とあった。鎮西探題とか、国司といったことは誤って使用されたものであるが、観音寺殿通玄理光大禅定門は大友系図と一致するものである。

持直という人は、大友歴代家督の中でも卓越した人物の一人ではあるまいか。

対外貿易を創め、又幕府の大軍を向うに廻わして生涯屈しなかった気骨、又数奇な境涯に在りながら尚多くの味方を失わなかった。特に家臣団に信望の厚い徳望の人であったに違いない。それは敗戦すると、必ず行方をくらますことが出来た。数多くの敗戦に生き延び得たことは、彼の徳望の厚く、深いことを物語るものである。

持直の花押影を見ても、真に整った花押で気品に満ちている。臥雲日件録（京都相国寺の僧周鳳の日記、臨済宗の名僧）に豊後万寿寺の僧芳瑞の話として次のように誌されている由である。

「大友の宅は茅をもって葺き、茨を敷きて弁ず。淳朴喜ぶべきや。凡そ政道の厭む所となるは、皆多欲に出ずるや、若し利欲の源を塞がば、天下豈に治め難からんや、庶う所諸州の守護皆大友の如くなれば四海清晏にして万民和を示すべし」

ここ観音寺の奥に「隠（かく）れ迫」という所がある。持直はここに厳秘の中に、忠誠をつくす輩下に見守られながら、姫嶽戦から八年間を悠々と、主としてここに過ごした可能性が多いと思う。生前、骨身を削って活躍した彼の憩いのために、静かな時の流れをさまたげてはならない。

幾度もそう思い返しながら観音寺を辞することにした。山門の両側あたりに小さくはあるが、時代物の顔の欠けた異様な石の高麗犬が、出入りの者を恰も監視するように、いぶかしげに、顔を傾けて私達を見送っていた。